

新しい競技規則で 3K ラグビー解決

2000 年ミレニアム改正以来待ちに待った改正競技規則が、2008 年 8 月 1 日より施行されることになりました。世界ラグビー機構 (IRB) は数年にわたり検討を重ねてきました。

We are looking at the game in a new light with the idea of making it simpler and easier to play and referee, and to ensure Rugby is understood and enjoyed by the increasing number of spectators that are being attracted to the game.

本当に面白い大変面白いスポーツであるラグビーが、多くの人たちに十分に楽しめずにラグビー人口減少の傾向が見られる現状の中で、この度の競技規則改正は、多くの人の興味を引きつけラグビーの普及・再興を図る手段であり絶好の機会であると思います。

ラグビーが普及している国数や人数を他の競技と比較すると、サッカーに及ばないまでもトップクラスのグローバルスポーツです。ワールドカップが 4 年毎に開催されて、それらの予選から参加国や観客数は非常に多く、増加傾向にあります。しかるに日本ではラグビー人口が減少傾向にあります。敏捷性と器用さを生かして体格の大きい人達にも十分対抗して戦うことのできる日本人にも合った楽しいスポーツです。

ラグビーが高校生に「きつい」「汚い」「危険が多い」3K スポーツとして評判がよくないそうです。入部する人が少なく、チーム数も減少の一途をたどっていることは残念なことです。

先ず、ラグビーが 3K スポーツであるという評判はラグビーに対する誤解と偏見によるものであると言わねばなりません。そして、そのような誤解と偏見を生み出したのは、一部のプレーヤーや指導者のラグビーに対する誤解と偏見が原因であるという事実は非常に残念なことです。誤解や偏見の原因となっている要素を取り除くために good, bright, interesting Rugby を誤りなくプレーすることを考察し、疑問を晴らしていきましょう。

要するにラグビーが面白くないから多くのひとが興味をもたないのです。プレーの継続が強調され推奨されますが、それは試合に勝つためだけでなく、ラグビーを面白くする要件でもあるのです。プレーが続くと面白い。面白いから一生懸命練習する。一生懸命やるからうまくなり強くなるのです。プレーが継続することは、観客にとっても試合が面白くなり、興味が増大し強くひきつけられるようになるのです。

プレーを継続するには、全員が常にボールをもっている人をサポートする意識を持ってよく走るといふことと、ボールを持った人は、継続するためにより有利な人にパスするか、味方がよりサポートしやすい位置で、サポートし易い態勢で (立ってボールをコントロールして) 相手にコンタクトすることが肝要です。

ラグビーは広いグラウンドを素早く走ったり、身体をぶつけてボールを取り合う競技ですから、全くきつくない言え言過ぎかもしれませんが、「走り詰めできつい」ということはありません。一生懸命走らねばなりません、勝負所での瞬発力が特に重要なのであって、常時トップスピード走るわけではありません。ボールの展開に応じて 15 人がいろいろな組み合わせ陣形で、組織的に交互に走るわけですから耐えられないというものではありません。身体をぶつけていっても、ぶつける力で勝負をつけるのでないのです。ボールの取り合いでぶつかるのですから、ボールを取ることに重点が置かれて、ボールを取ることに集中しボールを獲得すれば軽く吹き飛んでしまう程度の痛さであり辛さです。

雨の日の練習や試合ではどろどろになりますが、自然現象の範囲で、「汚い」といっても、雨の日グラウンドに寝転がらないかぎりどろどろになるわけではありません。立ってプレーするという基本原則を守ればそんなに汚れるものではありません。タックルされたら横 (ゴールラインに並行) に寝転がり、その上に重なるように全員倒れ込んでボールを確保しようとするのもラックと誤解されているのもボール停滞と痛さの原因です。ルールはボールを離しボールから離れることを指示していますからまず起こらない状況です。

練習着も自動洗濯機を使えば清潔になりますから心がけ次第です。雨にも負けず全力で戦った後の爽快感は経験したものでないと分からないものです。

ぶつかるきつさやいたさや「危険」については身体と身体が接触する競技ですから全くゼロにという訳ではありませんが、スクラムはルール通りポイントの上で足を使いボールをとりあう one shove プレーに徹底すればそんなに痛くありませんし、危険ではありません。1970 年代現代ラグビーは押しあいではなくコンパクトに堅く comfortable であることが目標とされましたが、大男のぶつかりあいを闘牛を見て楽しむ風潮に重ねるような混乱を残したまま今日にいたっています。

タックルも diving を誇張せず正しい方法でやれば事故の原因にはなりません。求められる勇気は、タックルで飛び込むことではなく、突進してくる相手をがっちり捕まえて離さないこと

です。タックルされたプレーヤーは、直ちにボールを放す（パスまたは身体から離して置く）ことは競技規則の3原則に沿った不変の厳守事項であることは言うまでもありません。

世界ラグビー機構（IRB）が、ラグビーを分かり易く面白くするためそしてもっともっと多くの人々に興味をもたれ楽しんでもらえるように競技規則改正にとりくんできた成果としての改正です。突然に押しつけられたものではないのです。改正の要点についてはコラムを参照にしてください。

レフリー諸君も改めて競技規則の研究につとめ good, bright, interesting game の創造に誇りをもって努めねばなりません。改正の simpler and easier to play and referee という意図を認識し意識して取り組むことが要請されているのです。

2008.05.08

西川 義行